
神は堕ちた。堕ちて過負荷となった。

リキッドwith不知火朱雀withダンスタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は堕ちた。堕ちて過負荷となった。

【Nコード】

N4621V

【作者名】

リキッドwith不知火朱雀withダンスタン

【あらすじ】

少年兵と天才魔導師と神との作り直し品。
今度はめだかから攻める。
予定は、めだか ヴェスペリア とある
永遠不滅を掲げる二次創作です。

墮神（前書き）

少年兵と天才魔導師と神との作り直し品。

ヴェスペリアで失敗したからめだかから攻める。

予定は、めだか ヴェスペリア とある なんでも
永遠不滅を掲げることになりました。

墮神

そこには、何も無かったことを覚えている。

そこには、人や動物、植物と言った生物。大地や空、海と言った自然。人工物やそうでないものと言った物すらなかった。

それ以上に

眼に映るものも
耳に残るものも
肌に伝わるものも

無かった

考えることも
悩むことも
怒ることも
悲しむことも
笑うことも
妬むことも
欲すことも

無かった。

在るのは三つ

死

生

我

ここには無い、あるものはこう言った。『神』
同じくこう言った。

我等が求めた『答え』

同じくこう言った

等しく訪れる『最後』

同じくこう言った

等しく歩みだす『最初』

同じくこう言った

未知なる『宇宙』

同じくこう言った

この世の『全て』

同じくこう言った

抗えぬ『絶対』

そして最後に何かがこう言った。

何も知らない『子供』と。『餓鬼』と。

『子供』は墮ろされた。何も無いところから、生命に墮とされた。人間の赤子として墮とされた。

だがその表情に眼も鼻も口も耳もましてや毛などは無かった。形は有るがなんの役割も果たしてないように見える。

生まれたばかりだというのに、目は開き何かを見据えているようで、なにもみていない。

生まれたばかりの赤ん坊は、呼吸ができないために大泣きして疑似呼吸するが、この『子供』は大泣きせず、呼吸もせず生きていた、笑った。何故か解った

「へ？」

そこにいた人間が人間たちが泣き叫ぶのは、一瞬後。

塵にマイナスあつたのは更にその一瞬後。
過負荷。墮ちきつた神はそれ。

罰神（前書き）

安心院さんは、生まれた時からスキル使えて、スキル駆使して、
成長 プラス 試験管計画創設っていう脳内保管よろしく。

罰神

「おやおや。これはこれは」

小さな少女が立っている。喋っている。

だが誰も答えない。なぜならそこにあるのは、十数の惨殺死体。そこに立っているのはただ1人その少女だけ。

「ここまでとはね」

その少女は綺麗に整った顔をしており、鮮やかな長く黒い髪を、首の間後ろでリボンを使って留め、そこから先にまだ伸ばし、先端あたりでもう一度留めている。

「弟ができるみたいだから来てみたら、僕の試験管フラスコでつくった人間たちが全滅ねえ」

赤子は先ほどの眼も鼻も口も耳、毛などが無い状態とは違い、赤子にしては整った顔立ちで、すやすやと眠りにについている。

「うーん。奪うばったのか…。最低の過負荷マイナスじゃないか。

奪うというのは、生きとし生きる者の最低の行為で、最も残酷で、最も苦しい罰だからね」

その少女、安心院なじみは一度困った顔をして見せた。

「駄目だ。封印も考えたけど過負荷マイナスが強すぎる。絶対にフラスコ計画に支障をもたらすね。弟君。悪平等ほく以外ではないなのに、圧倒的に格上認めざるを得ない。」

その少女は、赤子に手をかざし。

「君と、その過^{スキル}負荷に名前をあげるから、異世界にでも行っておいで。ドラゴンボールじゃないけど成長したら帰ってきなさい。」

じゃね。と手を振り、赤子は消える。

「弟君。君の名前は安心院^{マインス}禰^ミ示。過負荷はそうだな…罰^シ神^ンなんてどうか？まあ気に入らなかつたら変えればいい」

罰神（後書き）

夏休み。もう半分です…。
宿題やらないと…。

凍神（前書き）

前回から一カ月。しかも短い。

凍神

2011・12/3 AM11:30 Japan

「親父 BIGBOSSの残した、ザ・ラスト・サン最後の子供。こんなところにあっただはな」

リキッド・オセロットは日本の地に立っていた。勿論、観光などではない。

天国の外側来るべきアウターヘブンの再建、愛国者たちの反乱。その備えの獲得だ。

「あに兄弟よ。何を見たんだ？ 親父BIGBOSSの傍で何を見た？」

リキッドの眼前には幅1m、縦2m程の風呂桶のような者が二つあり、それぞれ10代前半程の少年と少女が氷漬けにされている。

「コールドスリープを解除しろ。男のほうだけで構わん」

「女のほうはどうします？」

「放っておけ。すぐに追手が来る。俺たちの計画の為には、ここでしくじるわけにはいかん」

プシューと空気が抜けるような音が聞こえ、少年のほうの氷が解けていく。

「教えてくれ。 ザ・ラスト・サン親父の意志よ」

氷がとけきり、少年は覚醒する。

少年は呼吸の方法を忘れてしまったのだろうか？ 喉に手を当て何度

も苦しそくに酸素を体に取り入れようと、咳き込んでいる。長い間コールドスリープの影響だろう。

「兄弟。名前は？」

それから数秒したところで。呼吸は正常になり、少年は口を開く。

「……安心院…襯示」

不滅が始まる。

凍神（後書き）

くそ短い。あと何回かこの状態が続きます。

MGSは入れないつもりだったけど、やっぱり入れてみました。

メタルギアは筆者の中で、最高の作品。これを越えられる作品は僕の中では存在しません。

神は脳筋（前書き）

前回から一か月。遅すぎる。

神は脳筋

2011・12/3 Over USA

「なるほど…。もうそんなに経つのか…」

リキッドは、ザ・ラスト・サン安心院禰示の回収を終え、両名VTOLに同乗し、アメリカの上空にいた。

「ああ。お前が眠ってから、六十年余。ありとあらゆる戦争が変わった。とくに2000年代はひどかったな。BIG BOSSの目指した戦争のバランスは、まさに崩れそうだったからな」

「だが、お前も大概だぞリキッド。IDによる戦争管理なぞ馬鹿馬鹿しいにもほどがある。貴様の言う2000年代よりも酷い」

禰示は小さいため息をつき。椅子に腰かけながら続ける。

「俺が眠りに就く前の時代のほうがずっとよかったぞ」

「いいや。俺はご免だな。薬物投与やマインドコントロール洗脳なぞされたくはない。というより、お前はとうだったんだ兄弟？」

リキッドは腕を組みながら窓に向かって体を翻す。

「いやいや。中々俺にとっては有意義だったよ。自分が生き延びる術を刷り込まれたと思うと、苦にはならん」

「40年代の生まれは違うな。永久睡眠コールドスリープの寝心地はどうだった？」

「知りたいか？」

「それも遠慮する」

1949年に彼はこの世界に生まれてきた。しかし、襯示襯示の風貌決して老人とはいえず、肩幅はリキッドより広く背は2mを越え、髪の色が白い事をのぞけば20代の若い男だ。

しかし、その体に纏う風格は20代のものではないだろう。百戦錬磨の武士のような力強さと、辺境に住む文人の静けさがある。山の様なのだ。大きくそして、動じない。

「で？ 何が目的なんだリキッド？まさかこんな昔話をするために起こした訳じゃないだろう？」

「当たり前だ。言っただろう。戦力の向上だと」

「もう一人の兄弟か……」

「そうだ。スネークは必ず動く。5年の内にな！」

リキッドは怒気がこもった声で叫ぶ。

「だが、俺は勧誘など協力せんぞ？ 俺に何をさせる気だ？」

「任務だ」

「六十年も眠り体もな舞っているだろう。決戦に備え調子をピークにしろ」

「……了解」

その答えは、しぶしぶといった感じで、「従いたくない」という気持ちで顔に滲み出ている。

「意外と素直だな。もっと反抗的だと思ったが……」

「……一応俺を起してくれたのは貴様だ。恩には報いるのが、日本人だ。」

「ジャパニーズ……」

その言葉に、リキッドは何か自分にはないものを感じた。

（『忠』）

「どうした？」

「いや、何も無い。それで、もう今から任務。それも潜入任務だが、何か注文は有るか？」

「デグチャレフのPTRDは有るか？」

その注文にリキッドは、一瞬沈黙してしまう。

「貴様は馬鹿か？ 話を聞いていたか？ あんな長銃どうするつもりだ？ 第一そんな旧型など置いていない！」（デグチャレフPTRD1941 1,941年製造の対戦車ライフル。全長約2m、重量約15kgの大型銃。少なくとも所持してこそそのような銃ではない）

襯示は一瞬子また顔を見ると、

「なら武器庫を見せてみる」

すくつ。と襯示は立ちあがり、おおよそ武器が置かれているであろう部屋に入り、中を漁り始めた。

「おお！ これがいい！」

「……」

バレットM82A2とダネルNTW-20の二つの怪物ライフル。「M82A2」は湾岸戦争の際2kmにある先の装甲車を撃破し、イラク戦争の際は、1.5km先のインド兵を真つ二つにして見せた、M82A1のいわゆる強化版。

そして「NTW-20」これは、説明が馬鹿馬鹿しくなる。先

ほどのM82A2が12.7mm弾を使用するのに対し、NTW-20は20mm弾を使用する。威力は 考えたくもない。

「もういい。勝手にしろ俺は口を出さん」

「どこへ行く？ リキッド？ お前の仕事はここからだぞ？」

「何？」

「この銃を小型化、フルオート化するんだ。どんな銃になっても構わんぞ。大きさは突撃銃ほどの大きさがいいな」

先ほど述べたような銃なのでどちらも、反動が大きく、銃の重さは20kg近く。フルオートにし、銃身を短くすれば当然その反動も異常になる。

リキッドは正に、あいた口が塞がらなかった。

「『 』」 《【なんだ残念、順調に異常に成り上がっアフフォーマルちゃたね】》
「『 』」

神は脳筋（後書き）

異常 マウントマン 巨人兵を入手しました。

マウントマン
巨人兵

全身の耐久力、筋力が異常に強くなる。その強さは、日乃影空洞、古賀いたみとは比にはならず。全力の拳骨は1k t 爆弾にも匹敵する。（使うと非常に疲れるが……）

ただしこのスキルは現在成長しており、前回の本気の一撃は14才（現在22才）の時のものであてにならない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4621v/>

神は堕ちた。堕ちて過負荷となった。

2011年11月15日05時38分発行